

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 21 日現在

機関番号：32686

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K18343

研究課題名（和文）アフリカ哲学の導入から世界哲学への発展

研究課題名（英文）Introduction of African philosophy and its development into world philosophy

研究代表者

河野 哲也（KONO, TETSUYA）

立教大学・文学部・教授

研究者番号：60384715

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 5,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、アフリカの現代哲学を日本に導入し、来たるべき世界哲学の発展のための礎石とすることを目的として、以下の三つの分野の研究を行った。(1)アフリカの現代哲学史：アフリカ哲学導入のために思想史的研究を行った。(2)アフリカの現象学的解釈学の可能性：アフリカの伝統的な宗教・世界観・人間観についての文化人類学的資料をもとにして、現象学的解釈学の立場からアフリカの生活世界を再構築する研究を紹介した。(3)概念比較による言語哲学の再構築：アフリカ諸言語や伝統思想に見られる独特の存在論、認識論、時間概念、道徳諸概念を西洋哲学のそれらと比較し、新しい思考法を開拓している哲学に注目した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究期間の3年間に、年2から3回、アフリカ哲学に関連する学会発表を行い、上記概要の(1)から(3)の成果は、2024年に講談社新書から刊行される『アフリカ哲学全史』にてまとめて公表される。各種の哲学思想関連の学会で多くの研究発表を行ったために、日本の哲学の専門家集団にはアフリカ哲学の概要やその興味深さを伝えることができ、これまで西洋中心主義的だった、あるいは、東洋やイスラム世界にしか関心のなかった日本の哲学・思想系の学会に相応のインパクトを与えることができたと思われる。またこれにより、哲学の視野と範囲を広げる世界哲学の運動に、一定の貢献をなしたと思われる。

研究成果の概要（英文）：With the aim of introducing contemporary African philosophy to Japan and making it one of the foundation stones for the coming development of world philosophy, this research was conducted in the following three areas. (1) History of Contemporary African Philosophy: to conduct a study of the history of ideas for the introduction of African philosophy. (2) Possibilities for an African phenomenological hermeneutics: studies that reconstruct the African life-world from the standpoint of phenomenological hermeneutics, based on cultural anthropological sources on traditional African religious, world and human perspectives, were introduced. (3) Reconstruction of the philosophy of language through comparative conceptualization: the ontology, epistemology, concept of time and moral concepts found in African languages and traditional thought were compared with those in Western and Japanese philosophy.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：アフリカ哲学 世界哲学 比較現象学 反植民地主義 エナクティブズム 汎アフリカ主義

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は長年、心の哲学を研究してきたが、心についての西洋の哲学や諸科学は、著しく西洋近代の文化枠組に拘束されている (Danziger 2010, 2012, 河野 2013)。だが西洋の研究者のほとんどは、日本の研究者も同様に、他の文化圏の心の概念や心身関係についての別の見方を参照しようとはせず、自らの枠組を超えられないでいる。これは、画一的なシステムと文化を暴力的に押し付け、現地の社会を分断し、その文化的遺産を無力化し、地元の人々と自然を搾取する植民地主義の残存であり、まさしく近代啓蒙主義の負の遺産である。現代のアフリカ哲学は、西洋近代哲学の根源的批判から始まる。現代の世界では多極化・多元化が進行し、哲学においても「世界哲学」(Garfield & Endelglass 2011; 伊藤他 2020) が興隆し、先進諸国の哲学科ではもはや西洋哲学ばかりが研究されてはいない。

アフリカは、地理的にも歴史的にも日本からは遠いが、それゆえに私たちの思惟を揺さぶる刺激的な哲学的発想に満ちている。近代化と西洋中心主義を、自文化中心主義に陥らずに克服する必要が、今日、どの国においても求められている。この文脈において、アフリカ哲学の導入と発展、世界の哲学の中でのその比較は、日本にとっても、世界にとっても重要である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、アフリカの現代哲学を日本に導入し、来たるべき世界哲学の発展のための礎石のひとつとすることにある。ここでいうアフリカの現代哲学とは、20世紀以降の、アフリカ大陸在住者とアフリカン・ディアスポラによる哲学的営為を指す。イスラム文化圏の哲学は本研究の主な課題としない。地域的には、サハラ以南のアフリカと、欧米のアカデミズムで展開された哲学、カリブ海諸国で展開された哲学を扱うことにする。

本研究では、日本ではアフリカの哲学がまったく知られていないという、あまりに大きい知的空白を埋めることを第一の目的とする。第二に、アフリカ哲学の導入は、世界哲学の発展に大きく資するであろう。ここでいう「世界哲学」とは、世界のさまざまな地域と文化で育まれてきた哲学的思索を掘り起こし、その多様な視点、思考、態度を相互に対話させる試みを指す。本研究のアフリカという鏡に照らした日本ないし東アジアの哲学の再検討は、世界哲学の重要な実践例となるだろう。

3. 研究の方法

そのための方法論的に本研究が提案するのが「知の三点測量」である。たとえば、西洋の近代化に対してアフリカがどのように解釈しどのように向かい合ってきたかを知ることによって、同じく西洋の近代化に対して日本や東アジアがとってきた解釈や対応を相対化して理解できる。三点測量は、二項間の関係を客観化し、その暗黙の前提も明るみに出すことができる。本研究は、アフリカ諸言語や伝統思想に見られる独特の存在論、認識論、時間概念、道徳諸概念を西洋哲学のそれらと比較し、私たちの哲学を新たな光のもとで捉え直す。実際の研究方法としては、文献研究、国内外研究機関への訪問と情報収集、海外の研究者の日本招聘による学術交流といった哲学思想系の研究方法を基本として、アフリカの現代哲学史、アフリカの現象学的解釈学の可能性、概念比較による言語哲学の再構築の三つのテーマを中心に研究を進める。

4. 研究成果

研究期間がコロナ・パンデミックの時期と重なり、渡航がかなり制限されたため、文化人類学者と共同してフィールドワークを行うタイプの研究は、十分に遂行できなかった。そこで、文献

研究と海外の研究者とのオンラインを含めた議論と情報交換を中心に研究を進めた。

その研究成果として、2021年度は、以下のような4つの学会発表を行った。2021年度日本哲学学会大会（岡山大学、5月）でのシンポジウムでは、オーガナイザーを務めながら、『人種差別とアフリカの反差別の哲学』というテーマのもとで、「反植民地運動と汎アフリカ主義」という提題を行った（テーマ ）。2021年日本アフリカ学会学術大会（5月）では「エスノフィロソフィーをめぐる哲学的論争」という個人発表を行なった（テーマ ）。日本哲学学会第1回秋季大会（9月）では「南アフリカにおける和解と、ウブントゥの概念：黒人意識運動からマンデラへ」という個人発表を行なった（テーマ ）。日本現象学会第43回大会公募シンポジウム「人種差別の現象学」（11月）では、「ポーリン・ホントウンジのエスノフィロソフィー批判の妥当性」という提題を行なった（テーマ ）。

2022年度は、環境哲学とSDGsに関わる倫理的諸問題をテーマにして、大きく以下の三つの研究と調査を行なった。第一に、5月の日本哲学学会インターナショナルセッションでシンポジウムを企画し、T.S.Boni博士とM.Perina 博士を招聘し、オンラインで「アフリカーナ哲学への招待」というシンポジウムを実施した（テーマ ）。第二に、9月に、コフォリデュア工科大学講師のF.Aryee氏をガーナから日本に招聘し、首都圏と東北の各地で環境倫理学に関する講演会を行ってもらったと同時に、その訪問地で、とくに海洋汚染に関する訪問調査を行なった。第三に、12月末から1月初頭に、ケニアのナイロビにあるケニヤッタ大学、マウント・ケニヤ大学を訪問し、環境問題やSDGsに関する調査・研究・交流計画に関する会議を行ない、近郊のマサイ人集落を訪問し、環境問題に関する聞き取りを行なった（テーマ ）。

2023年度は、ようやくコロナ・パンデミックが終了し、海外交流が通常化したために、これまで控えていた海外への調査出張を二度、行った。2023年6月には、セントラル・フロリダ大学哲学科のB.Janz教授を訪問して情報交換や研究打ち合わせなどを行い、ついで、ネグリチュード運動発祥の地である、フランス海外県マルチニーク島を訪問し、博物館や史跡訪問などで資料収集を行った（テーマ ）。2024年3月には、ガーナ共和国に出張し、Aryee氏のガイドで、ガーナ独立関連の史跡、奴隷貿易時代の交易所などの史跡見学、さらにSDGsや環境保護関連の公園と施設を訪問した（テーマ ）。これらの訪問で得た情報や写真などの資料は、2024年7月刊行予定の『アフリカ哲学全史』（講談社新書）の原稿に反映されている。約20万字の本書の執筆が本研究の最大の成果であり、集大成である。

『アフリカ哲学全史』（近刊）の目次は、以下のようになる。序章「アフリカ哲学への誘い」、第一章「アフリカ哲学史1：古代からキリスト教哲学へ」、第二章「アフリカ哲学史2：前植民地期から反植民地闘争へ」、第三章「アフリカ哲学史3：西洋の植民地主義と人種主義の哲学」、第四章「アフリカ哲学史4：反植民地主義闘争と汎アフリカ主義の哲学」、第五章「アフリカ哲学史5：汎アフリカ会議からハーレムルネサンスへ、哲学としての音楽」、第六章「アフリカ哲学史6：ネグリチュード運動」、第七章「アフリカ哲学史7：ファノンとカブラル」、第八章「現代の哲学1：エスノフィロソフィーとその批判」、第九章「現代の哲学2：アパルトヘイトの超克、ガンジーとファノンからピコとマンデラへ」、第一〇章「現代の哲学3：赦しとウブントゥ」、第一一章「現代の哲学4：現代哲学における重要な哲学者」、第一二章「現代の哲学5：世界に問いかけるアフリカ哲学」、「終わりに：世界哲学に向けて」。本書の前半では、アフリカ哲学史全体を扱っているが、第三章から現代の問題を扱い始め、第八章までで主にテーマ 、第九章から第一二章で、テーマ を扱っている。22年度のAryee氏の招聘とナイロビ出張、23年度のマルチニークとガーナ出張によって記述に厚みとリアリティを与えることができたことを確信している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 KONO, TETSUYA
2. 発表標題 If Philosophy is Language Relative, What Does That Mean?: A Meta-Philosophical Proposal
3. 学会等名 第七回日中哲学フォーラム：世界哲学において東アジアが果たす役割（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 アフリカの哲学はあったし、ある。さらに何が問題か？
3. 学会等名 2023年日本哲学会研究大会公募ワークショップ
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 KONO, Tetsuya
2. 発表標題 An Introduction to Africana Philosophy: The history and current developments in Africana philosophy
3. 学会等名 2022年度日本哲学会大会, International Session
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 音楽に媒介された政治的志向性の現象学のために：ネグリチード運動とハーレム・ルネサンスについての哲学史的考察から
3. 学会等名 日本現象学会第44回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 反植民地運動と汎アフリカ主義
3. 学会等名 2021年度日本哲学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 エスノフィロソフィーをめぐる哲学的論争
3. 学会等名 2021年日本アフリカ学会学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 南アフリカにおける和解と、ウブントゥの概念：黒人意識運動からマンデラへ
3. 学会等名 日本哲学会第1回秋季大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 ポーリン・ホントゥンジのエスノフィロソフィー批判の妥当性
3. 学会等名 日本現象学会第43回大会公募シンポジウム
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 河野哲也	4. 発行年 2024年
2. 出版社 講談社新書	5. 総ページ数 -
3. 書名 アフリカ哲学全史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

河野哲也の哲学・倫理学研究室 https://www2.rikkyo.ac.jp/web/tetsuyakono/index.html

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 日本哲学会22年度研究大会インターナショナルセッション	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 マウント・ケニヤ大学でのSDGsに関する哲学の研究会議	開催年 2023年～2023年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------